

織田ステノの英雄叙事詩

奥田統己

一・本稿の目的

ユカラ、サコロペなどと呼ばれる英雄叙事詩はアイヌ口頭文芸のなかでもっとも名の知られているジャンルである。にも関わらず、これまで英雄叙事詩のまとまった資料が公刊されているのは北海道

日高地方西部の沙流川流域地方（門別町・平取町）および胆振地方（登別市）に限られ、ほかの地方については散発的な資料しか得る

ことができなかった。こうしたなかで一九八五年から、日高地方中東部の静内町に在住する織田ステノさんの語る英雄叙事詩ほかの口頭文芸についての聞き取りが静内町教育委員会によって進められてきた。そして一九九一年からはその成果が『静内地方の伝承－織田

ステノの口承文芸－』（静内町文化財調査報告）シリーズとして公刊され、一九九四年三月刊行の第四巻までで英雄叙事詩の公刊計画が完了した（なお一九九五年三月には神謡が公刊され、シリーズが完結する予定である）。

筆者はこれらの事業に一九八八年から参加する機会を与えられ、テキストの録音・文字化・対訳、およびあらすじ・登場人物・場面

設定などの整理の作業を担当してきた。そこでこのたびの英雄叙事詩の公刊完了にあたり、同シリーズで行った報告を横断的に概観しつつ、織田さんの英雄叙事詩の特質についての若干の基礎的な考察を行い、今後のアイヌ英雄叙事詩の内容の分析や地域差の考察などの材料を提供したい。

二・資料一覧

まずそれぞれの報告書の記述に従って本稿の資料を一覧する。なお伝承元についてはそれぞれの報告書には記載がなく、古原（一九四五）に従っている。

	口演日付	口演形態	所要時間	伝承元
第一巻	（約）			
ユカラ 1	85年8月22日	節つき	七〇分	イタクラッチさん
ユカラ 2	86年1月27日	節つき	一二四分	イタクラッチさん
第二巻				
ユカラ 3	86年2月21日	節つき	一二八分	イタクラッチさん

ユカラ 4 88年8月23日 節つき 九六分
（）9月 1日

岡本ゆみさんの
録音テープ

第三巻

ユカラ 5 86年12月4日 節なし 一六〇分
ユカラ 6 87年3月6日 節なし 九〇分
ユカラ 7 89年9月12日 節なし 五二分

元静内のおじいさん
イタクラッチさん
イタクラッチさん

第四巻

ユカラ 8 87年4月6日 節なし 二八分
ユカラ 9 89年7月21日 節なし 二九分
ユカラ 10 90年6月18日 節なし 四〇分
ユカラ 11 91年4月14日 節つき 九五分
ユカラ 12 91年8月25日 節なし 三六分
ユカラ 13 91年11月27日 節なし 六二分

（詳細不明）
イタクラッチさん
レスノさん
イタクラッチさん
イタクラッチさん
ムイテノさん

（一八六六一一九五八）とも接する機会が多く、その娘であるレスノさん（一八九五一九七三）、ムイテノさん（一九〇一一九八八）らとは幼いころ実の姉妹同様に育つたということである。この二人からはそれぞれユカラ10、ユカラ13が伝承されている。後半生では家庭を持って農屋の対岸の字豊畑に永住し、一九九三年に亡くなつた。

なお織田さんによればユカラ5は自分自身は父方の実家である元静内のおじいさんから伝承したものだが、イタクラッチさんやヌムヌレさんも語つていたということである。ユカラ4の伝承元である岡本ゆみさん（一八九六一一九九〇）は、日高地方様似町宇岡田に暮らしやはり口頭文芸の語り手として知られていた。このユカラはある研究者が岡本さんから聞き取った録音を織田さんに聞かせてくれたので覚えたということである。その経緯の詳細は佐藤（一九九二）に述べられている。またユカラ8もある研究者が聞かせてくれたということだが、その詳細は現在のところ不明である。（この項の記述に際しては古原（一九九一、一九九二）を参照している）。

三・語り手の経歴と伝承元

織田ステノさんは一九〇一年に静内町東部海岸の字元静内に生れた。幼いころに両親をなくし、静内川上流の字農屋にあった母の実家に引き取られて育つた。母方の叔父のイタクラッチさん（一八八五一一九五七）は一族のなかで指導的な立場にあった人で、織田さ

四・ジャンル分類と語りの形式

織田さんは物語性を持つ口頭文芸を大きくユカラ（英雄叙事詩、カムイユカラ（神譜）、ウウェペケレ（散文説話）の三つのジャンルに区別していた。これらのジャンル名称は沙流・胆振地方と基本

的に同じであり、英雄叙事詩をサヨロペと呼ぶ道東北地方などとは異なる。しかし日高地方の中西部から胆振地方東部にかけて人文神の物語（聖伝）を指すとされる（金田一（一九三一）、久保寺（一九七七））「オイナ」という言葉は、物語の種類としては聞いたことがないということである。ただし後述するようにユカラの登場人物が「オイナユビ」「オイナサハ」という固有名を持つことはある。

また自分自身あるいは自分の先祖などが現実に体験したことを物語ることをイコペッカといい、これは場合によつては散文説話とほとんど区別のつかない文体で語られる。ただしイコペッカのなかには苦労話や思い出話といった内容のものまでが含まれ、必ずしも独立した物語として意識されているのではない。また萩中（一九九二）は、ユカラ6や11のように冒頭の自叙者が女性であるものを織田さんはマツユカラと呼ぶと報告しているが、筆者の調査によればこの点は必ずしも確実ではない。

英雄叙事詩は一般に棒で炉ぶちを叩くなどしてリズムをとり、短く繰り返されるメロディーに詞句を乗せて語る。織田さんもこれが本来の語りかただと考えており、シノッチャコキ（節とともにする）する、あるいはシノッチャコイエ（節とともに言う）する、と言う。

二・の一覧で「節つき」としたのはこのようにして語られたものである。なおこの語りかたの詳細については奥田（一九九〇）を参照されたい。

しかし場合によつてはユカラの内容を節をつけずにウウェペケレ

と同じような口調で語ることもある。そうして語られたものを「節なし」として示した。織田さんはそうした語りかたを「ウエベケレに言う」と呼ぶが、ジャンルとしてはあくまでユカラであり、本来のウエベケレとは区別して意識していた。同じユカラを節つきと節なしの両方で語つたものも一・に述べた調査のなかで採録されている（報告書では節つきのほうだけを取り上げている）。節なしで語つたものはリズムやメロディーをまったく伴わない散文になつており、節つきのときに見られる四～六音節程度の行の区切りは常套句など以外では現れない。

また節つきで語つたものでも末尾の一割程度は節をつけない散文で語られることが多い、最後まで節をつけて語られたのはユカラ3だけである。織田さんはそうすることを「最後をウエベケレに言う」と言う。このように語る理由は単に途中で疲れたからだという事であるが、節を伴う物語の末尾を節なしで語るのは他の語り手にも広く見られることであり、何らかの規範を反映しているとも考えられる。なおユカラ5などを始めから節なしで語つたのは、語り手に負担がかからないよう採録者が配慮したためである。

五・各話のあらすじ

ユカラ1

（トウンプオルンクルが物語る）

私はアイヌモシリ（地上の人間の国）でオトペランマツ（地上の

姉）に育てられていたが、ある日彼女から、両親とボイヤウンペ

（地上の兄）とが、ボクナモシリ（地下の国）に住む悪者のトウムンチに殺されたことを聞かされた。そこで私は、リクンモシリ（高い國一通常の神々の住む國）に住むオイナサハ（天上の姉）の助けも得て、トウムンチの村を滅ぼした。しかしそのことをオイナサハの許婚のカンナカムイが嫉妬して、オイナサハの兄のオイナユビ（天上の兄）を折檻しているというので、怒つてリクンモシリに昇つて行つた。そして同じく地上から昇ってきたオトペランマツの加勢を受けながら、リクンモシリに住むもう一人の兄カニオトブウシの止めるのも聞かずに、カンナカムイと戦つた。結局カンナモシリ（上の國一偉い神々の住む國）の神々の力によつて、いつたんカムイモシリ（死者の國）へ行つていたボイヤウンペを復活させてもらひ、地上の自分の村へ連れ帰つてオトペランマツと三人で暮した。

ユカラ2
(ボイヤウンペの父が物語る)

私と妻はアイヌモシリのシンヌタブカ村で女の子と男の子とを産んだあとカムイモシリへ行き、そこでも男と女の子をもうけだ。しかし地上の子供たちの評判ばかりが高いのに腹を立て、カムイモシリで生まれた子たちに「地上の兄たちを殺せ」と言い聞かせていた。（ボイヤウンペの弟が物語る）

私は両親がどうして地上の兄たちを殺せといふのか、不思議に思ひながら育つていた。

それからは四人とも家庭を持つて幸せに暮らし、やがて年老いて死んだ。

ユカラ3
(ボイヤウンペが物語る)

私はシンヌタブカ村で姉のオトペランマツと一緒に暮らしていた。姉はいつも「早くオタサム村にあなたの許嫁を訪ねて行け。」と言つてゐた。ある日私が思い立つてオタサムへ行くと、許嫁に横恋慕をしているカンナカムイの息子が先回りしていた。そこで私はカ

（ボイヤウンペが物語る）

シンヌタブカの城で私は姉に大切に育てられていた。私が初めての狩に出かけたとき、若者が六人現れて「私たちにも獲物を分けてくれ。」と言つた。私が怒つて彼らを切り殺すと、一人だけが逃げて行き、私も後を追つてカムイモシリまで行つた。実は、その若者は私の弟で、私の両親は私をおびきよせて弟に殺させようとしていたのだった。しかし弟と妹が「我々は兄さんの味方をする。」と言うので、両親は自分たちで私を殺そうとした。そこで私は両親を殺してボクナモシリに落としてしまい、弟たちを地上のわが家へ連れ帰つた。

（ボイヤウンペの弟が物語る）

私たちも体を清めてもらい、家に入った。

（ボイヤウンペの妹が物語る）

姉はこれまでの事情を説明してくれた。

（ボイヤウンペが物語る）

ンナカムイと戦いを始め、ついにリクンモシリまで上がつて行つて、姉と許嫁の助力を得ながらリクンモシリを荒し回つた。すると

リクンモシリに住む私の兄のカニオトブウシが「このままでは人間

も神々も滅んでしまう、カンナカムイは偉い神々が处罚するから気を静めてくれ。」と私をなだめた。そこで私は地上に戻り、許嫁と結婚した。やがて生れた長男をオタサムの村の跡取りに据え、子供たちにお互いの行き来を絶やさないよう言い残して死ぬのである。

ユカラ 4

(ボイヤウンペの息子が物語る)

物心ついたときから私は手足を縛られ海上で生きていた。ある時

私は大きな岩の上に打ち上げられたが、杖を持った男(岩の親父)に怒られて海のなかへ投げ戻された。すると岩の上に美しい女性が

立つて、私にこう言つた。「私はあなたの姉で、岩の親父にさらわ

れてここに隠されていたのだ。私たちの父ボイヤウンペと身重の母

は私を探して旅に出で、ハンケレップンクルの村まで行つた。そこで

休んでいるときに父は岩の親父に暗殺され、母もあなたを出産して

海の神に託したところで殺されてしまった。私は成長して巫力が強くなつたので、岩の親父の目を盗んであなたを呼び寄せたのであ

る。さあ復讐をしなさい。」そして次の日私は姉に武装させてもらつて

岩の親父を殺し、また岩の親父を守護神としているトウムンチの

村へも攻めて行つて地獄へ落とした。それから姉と私は父の家へ戻り、神々と先祖を祀りながら幸せに暮らした。

ユカラ 5

(オタスツの召使いのおばさんが物語る)

私の両親が年老いて死んだあと私はオタスツのお嬢さまの子守りをしていた。ある日私が子守りをして出歩いていたときにクスルの

村人が村長さま夫婦を殺してしまつた。それから私は一人でお嬢さまを育てた。

(オタスツの村長の娘が物語る)

私は子守りのおばさんに育てられていた。ある日おばさんは「クスルの奴らが、私たちが生き残ったことに気がついてやつてくる。」

といい、私をゴザでぐるぐる巻きにして隠してくれた。おばさんが殺されたあと、私は転がりながら浜まで行つた。

(ハンケレップンクルの村長の末息子が物語る)

私は両親と姉と兄と暮していて、両親たちはたいへん私をかわいがつてくれた。

(ハンケレップンクルの村長が物語る)

私の末息子は神々に見守られているらしい。

(ハンケレップンクルの村長の末息子が物語る)

ある日私は舟でとある浜に行き、ゴザで巻かれた娘を見つけて

帰つてきた。

(ハンケレップンクルの村長が物語る)

私はこれまでの事情を年上の息子に話して聞かせようと思う。

(ハンケレップンクルの村長の末息子が物語る)

ある晩、私が用足しに出ると、父が兄にこういっているのが聞こえた。「実はかつてトウイマレブンクルにむりやり誘われてオタサムの村を襲つたことがある。末の息子はそのとき私がこっそり助けた赤ん坊なのだ。そして私の思うに、彼が拾つてきたのはオタスツの村長の娘なのだ。さあ彼を助けて復讐に行きなさい。」そこで私は改めて父から事情を説明してもらった。次の日私は兄たちと舟に乗り、トウイマレブンクルへの復讐を遂げて帰ってきた。そしてオタサムへ行って父の家を再建した。やがて私たちはクスルへの復讐も果たし、ハンケレブンクルの若い夫婦を一組オタスツの留守番に残して、オタサムに暮した。やがてオタスツの娘が大きくなると私はちは結婚した。そして最初の息子が大きくなるとオタスツの村長のあとを継がせ、お互に行き来して暮しながらやがて年老いて死ぬのである。

ユカラ 6

(オトペランマッが物語る)

シンヌタブカで兄のボイヤウンペが私と二人の弟を育てていた。ある晩下の弟のトゥンブオルンクルが何者かにさらわれた。兄は下の弟を探し回り、やがて帰つてこなくなつた。

(トゥンブオルンクルが物語る)

私は寝床のなかに隠されながら姉に育てられ、やがて大きくなると姉の夫に迎えられた。ある日姉は私に「実はあなたはトゥンブオルンクルであり、トウムンチである私にさらわれてこのルモイで私

の夫になつたのだ。ところがついに兄さんたちがあなたを見つけてやつてくる。悪い私が殺されたあと、あなたは兄さんといっしょにシンヌタブカへ帰りなさい。」と言つた。しかし私は「これまで育ててくれたのだから、私も彼女と運命を共にしよう。」と思つた。そこへ長兄のボイヤウンペと次兄のアトウサオツカイが現れたが、私は彼らを殺してしまつた。すると実の姉のオトペランマッがやつきて、育ての姉は殺され、私は捕らえられてシンヌタブカへ連れ戻された。それからは姉はいつまでも「身内殺し」と罵りながら私の世話をし、私も深く後悔して苦しみながらやがて年老いて死ぬのである。

ユカラ 7

(ポイヤウンペが物語る)

私は妹と許嫁のポンチュアカウンマッと暮していた。ある晩、トウムンチの男が妹と許嫁を連れさつて行つたので、私はその後を追つて行つた。男は腐つた海を渡り、海の向こうの氷の山へ飛び込んで行つた。その奥には石ばかりでできた村があり、そのまん中の大きな家からトウムンチの女が出てきて「悪いのは私たちでした。この川の源には松明の槍を持つた鳥がいるけれど、決してそこへは行かずにお帰りなさい。」と言い、二人を返してくれた。私はトウムンチの村をすっかり滅ぼしてしまい、川を遡つて行つて松明の槍を持つた鳥と戦つた。そこヘリックンモシリから狼の首領の娘が加勢にきたので、どうにか私は勝つことができた。狼の娘は「これから祭のときに狼の首領を祈るなら、子孫まで守つてあげましょう。」と言

い、娘に慕情を抱いた私に許嫁といつしょに暮すよう諭して、リク

ンモシリに帰って行つた。そこで私は自分の村へ帰り、狼の首領を

はじめとする神々に祈りを捧げた。そしてだんだんと村は大きくなり、私はやがて年老いて死ぬのである。

ユカラ 8

(ポイヤウンペの息子が物語る)

物心ついたとき私は姉に育てられていた。姉は「お前は実はポイヤウンペの息子で、私は狼の娘なのだ。お前の父の評判の高いのに私は嫉妬して、ある晩お前の父親たちを家ごと焼き殺し、赤ん坊のお前が隠されていたのを拾つてきて今まで育てているのだ。」と私に自慢話をしていた。私はそれを聞いていたうちに自分の両親を憚れんで復讐心を持つようになつた。私たちの住んでいた家は海のはての雲が地面につき刺さるところにある大きな岩山の頂上に建つていた。やがて私は姉に頼んでついに獣に連れていくてもらひ、はじめ

てヤウンモシリ(陸の国)に降り立つた。狩を終えて狩小屋で食事をし姉が寝入つてしまふと、私は小屋に火をかけて逃げ出した。姉は「我が子よ、お前は無事か。お前の父親の武具は、川の上流の松の木にかけてあるのだ。」といって死んでしまつた。復讐を遂げた私は父の武具を見つけて身につけた。(織田さんによれば、話はまだ途中だが自分が聞いた録音がここまでだつたので続きは知らないとのことである。)

ユカラ 10

(ノックハウンチャチャの妻が物語る)

私の夫のノックハウンチャチャは追い剥ぎであった。あるとき夫は下の娘のイクサマツを海の神様の嫁にやるといって海に投げ込んでしまつた。そこで私は上の娘に連れられて逃げ出し、ある山の奥に家を建てて、そこで夫の目を盗んで暮した。

(ノックハウンチャチャが物語る)

そのあとも私は追い剥ぎをしていたが、やがて年を取つて後悔し、人を求めてシンスタブカに着いた。そこには女が一人いて、私

ユカラ 9

(ポイヤウンペが物語る)

私は自分の国土であるヤウンモシリを守つて暮していた。あるとき、レブンクル(沖の人)が私の悪口を言いながらヤウンモシリの村を攻めたてた。私がレブンクルと戦うと、彼は逃げ回つたあげく、海の井戸のようなところに飛び込んでしまい、私もその後を追つた。その下にはトウマンチの村があつた。レブンクルが逃げ込んだ家に私が入つて行くと、レブンクルは客の座に座り、上座にはトウマンチの勇者が座つて「お前は人間のくせに私の火の神のそばで戦おうとするのか。」と言ひながら私に斬りかかってきた。私は「悪いのはこのレブンクルのほうではないか。」と言つてそのトウマンチたちを殺してしまい、村全体を滅ぼしてから、海の井戸の外へ出て自分の方へ帰つてきた。

を召使に使ってくれることになった。そのうちに女は私を誘惑し、やがて彼女は妊娠した。

(シンヌタブカの女が物語る)

ノックウンチャチャが出産の支度のために交易に行つたあと、どこからか一人の若い男がやってきた。そこで私は「ノックウンチャチャが私に言い寄ってきたのだ、帰ってきたら彼を殺してくれ。」とその男に頼んだ。

(シンヌタブカに現れた若い男が物語る)

私はその女に誘惑され、帰ってきたノックウンチャチャを殺した。やがて生まれた男の子が成長するさまを見て、私はその子に復讐されるのを恐れ、自分の村へ逃げ帰ってきた。

(シンヌタブカの女が物語る)

息子は大きくなつてから「私の父を殺したのは誰だ。」と言つて私を切り殺した。

(シンヌタブカに現れた若い男が物語る)

ついに私は見つけられて殺された。

ユカラ 11

(ノトエランマツが物語る)

私はシンヌタブカで兄のボイヤウンペに育てられ、やがて炊事ができるくらい成長した。

(トウンブオルンクルが物語る)

あるとき、兄のボイヤウンペはハンケレブンクルの村を訪ねに舟

に乗つて出たきり帰つてこなくなつた。そして数年後、姉ノトエランマツは私に「ハンケレブンクルの村長とその上の妹は悪人で、兄上を婿にしようとして巫術で呼び寄せ、断られるとき兄上を捕えて折檻しています。さあ助けに行きなさい。」と言つた。そこで私がハンケレブンクルの村の河口に行くと、そこには村長の上の妹が寝そべて「私ほど強いものはいない。」と自慢している。そこで私は彼女を斬り殺し、その姿に変装してハンケレブンクルの家に行つた。そこで私は「トウンブオルンクルを殺してきたぞ。」と言い、兄を家の外へ連れ出して私の村へ帰した。そしてハンケレブンクルの村長の下の妹の助力も得て彼らを滅ぼした。私は彼女を連れ帰つて結婚し、私たちの村は盛んになつた。そしてやがて私は年老いて死ぬのである。

ユカラ 12

(ボイヤウンペが物語る)

どういうわけか私は一人で育つていた。ある日許嫁のポンチュブカウンマツが来て「狼の娘があなたに結婚を迫ろうと仲間とともにリクンモシリから降りてきます。」と言つた。そこで私は、それならポンチュブカウンマツを先に妻にしてしまおうと彼女を犯した。そこに狼の娘たちが現れ、私は全員地獄に突き落として滅ぼした。二、三日するとポンチュブカウンマツが嫁入り支度をして戻つてきたので、私たちは改めて結婚式をあげた。それからは私たちは二人で働いて子供も大勢できた。そしてやがて年老いて、子供たちに

「許婚者どうしははやく結婚するのだぞ。」と言ひ聞かせて死ぬのである。

ユカラ 13

(ポイヤウンペが物語る)

ある日私が外出しているうちに、まだ赤ん坊の下の息子が泣き狂つて妻の胸乳をえぐつて殺してしまつた。しかたなく私は赤ん坊を振りかごに入れて、神々の助力を頼んでいた。

(石のトウムンチの女が物語る)

私はポイヤウンペを夫にしたかったが、彼は妻帯しているので、やがて生れた下の息子を奪おうと、私はその子に母親を殺させ、振りかごのなかからさらつてきた。しかしポイヤウンペが息子を探し村々を探し回つたあげくに、私たちは見つけられた。

(ポイヤウンペの下の息子が物語る)

私は物心ついたときから石の家のなかで姉に育てられていた。家

の外では神々が戦つている音が聞こえていた。やがて姉が外から帰り「お前はポイヤウンペの息子なのだ。私は今までお前の父親に戦つて、今ようやく滅ぼしてきたから、これからお前を夫にするのだ。」と言つた。私はそれを聞いて憤り、彼女が酔つているすきに斬り殺してボクナモシリに突き落とした。そして私はシンヌタブカへ帰り、そこで待つていた兄と姉と一緒に暮した。そして家庭を持つてからも自分で母を殺したこと悔やみながら年老いて死ぬのである。

六・場面設定

七・で詳述する主な自叙者はすべてアイヌモシリを生まれ故郷としている。「アイヌモシリ」という言葉は直訳すれば「人間の国」であり、地上の世界全体のことである。そのなかにはヤウンモシリ「陸の国」レブンモシリ「沖の国」などの国々がある。

ヤウンモシリのなかにはさまざまな名前の村が描かれる。そのなかでもっとも現れることの多いのがシンヌタブカであり、ユカラ 1、2、3、4、6、7、11、13で主な自叙者の故郷として明示される。この点は沙流・胆振の英雄叙事詩と共通する特徴である。なおユカラ 10 にもシンヌタブカという村が描かれるが、七・でみると、ここにユカラでは主な自叙者の故郷だとは言えない。また織田さんはかつてシンヌタブカがどこにあるのかを周囲の人々に尋ねたが、誰も知らなかつたということである。

いっぽう道東の英雄叙事詩の主人公の居住地とされるオタサムとオタスッはユカラ 3(オタサムのみ)と5にだけ描かれる。またポンチュブカ村の住人がユカラ 7と12に登場する。このポンチュブカ村は静内の近くの高い山から太陽や月が出てくるところの村だと織田さんは聞いているそうである。ユカラ 5 ではオタスッから山を越えて行つたところに敵役のクスルの村がある。織田さんはここは現在の釧路にあたると考えていたが、若いころは現実の釧路についての話は聞いたことがなく、釧路のイメージは口頭文芸にあるとおり

の恐ろしいものだったということである。なおクスルという地名が沙流地方の口頭文芸で用いられるのは主として散文説話のなかでである。

レプンモシリは舟に乗って海を渡つて行くところにある。そのうちハンケレブンクル（近くの沖の人）の村はユカラ4、5、11に、トウイマレブンクル（遠くの沖の人）の村はユカラ5と11にそれぞれ描かれる。なお織田さんによれば、ハンケレブンクルの村は本州であり、トウイマレブンクルの村は外国かどこかだということである。またユカラ6でトウムンチの女が住むルモイの村も海を渡つて行くところにある。

リクンモシリはアイヌモシリの直上の天界であり、ユカラ1、3、7、8、12、13で具体的に描写され、ユカラ2、4、6でも言及される。ここには人間にとって比較的身近でふだんから交渉を持っている善悪さまざまの神々が住んでいる。カンナモシリはリクンモシリのさらに上にある天界であり、ユカラ1と3で言及される。この世界は物語の舞台になることはないが、アイヌモシリやリクンモシリの全体を支配する神々が住む。

カムイモシリはアイヌモシリの住人が死んだときに行く世界であり、ユカラ1、2、3、6、11、13で言及されている。なお織田さんは「神」も「人間の死者」もカムイといいう言葉で表現するが、両者は区別されており「神」はリクンモシリまたはカンナモシリに住み「人間の死者」はカムイモシリに行く。これは散文説話でも現実の信仰観でも同様であり、ジャンルによる違いは見いだされない。

ポクナモシリはアイヌモシリの地下にある世界である。その一番上がトウムンチの村で、一番下にはアサムサクコタン（底のない村）がある。この世界はユカラ1、7、9で具体的に描かれ、ユカラ2、3、4、5、6、11、12、13でも主な自叙者に殺された敵が落とされる地獄として示される。ポクナモシリの入口はユカラ7では海に向こうの氷の山、ユカラ9では海の井戸となっている。またユカラ8に描かれる「雲が地面につき刺さるところ」はアイヌ口頭文芸の常套句で世界の果てを表す。

これらの世界のあいだを移動するときやアイヌモシリのなかで遠いところや高いところへ移動するときには空中を飛行する描写がよくみられる。しかしユカラ5と10ではそうした描写が見られず、登場人物は徒歩や舟のみで移動する。

七・主な自叙者

英雄叙事詩をはじめアイヌ口頭文芸の多くのジャンルは、ある登場人物が物語中でのきごとや他の登場人物の言動を自己の見聞として物語るという文体（自叙体）をとる。ここではその人物を自叙者と呼ぶ。

織田さんのユカラでは、あらすじに示したように自叙者が途中で交代することが少なくない。全体が一人の自叙者によって語られるものが七話、途中で一回交代するものが二話、二回以上が四話である。これに対しこれまで公表されている沙流・胆振地方の英雄叙事事

詩では自叙者が途中で交代することはまれである。なお散文説話では織田さんのものでも沙流地方でも、自叙者が交代することがときおり見られる。

しかしユカラ10を除くすべてのユカラでは、ある登場人物が全体の半分以上をとおして自叙者となっている。その人物を「主な自叙者」と規定すると、それぞれのユカラの主な自叙者は次のようになる。

- | | |
|--------|-----------------|
| ユカラ 1 | トウンブオルンクル |
| ユカラ 2 | トイヤウンペ |
| ユカラ 3 | トイヤウンペ |
| ユカラ 4 | トイヤウンペ |
| ユカラ 5 | ハンケレブンクルの村長の末息子 |
| ユカラ 6 | トウンブオルンクル |
| ユカラ 7 | トイヤウンペ |
| ユカラ 8 | トイヤウンペの息子 |
| ユカラ 9 | トイヤウンペ |
| ユカラ 11 | トウンブオルンクル |
| ユカラ 12 | トイヤウンペ |
| ユカラ 13 | トイヤウンペの息子 |

これらに対して、ユカラ10ではノツカウンチャチャの妻が自叙者となる割合がおよそ二割、ノツカウンチャチャがおよそ四割、シヌタブカの女がおよそ一割、シヌタブカに現れた若い男がおよそ三割であり、主な自叙者を認定するのは困難である。

これらの主な自叙者はいずれも物語の末尾まで自叙している。またほとんどの場合、最終的に戦いに勝利して故郷で平和に暮らす。ユカラ6の主な自叙者のトウンブオルンクルは姉との戦いに敗れるが、殺されるのではなく実家に連れ戻されて天寿を全うする。またユカラ8の末尾を織田さんが「話の途中」と意識しているのは、主な自叙者が故郷に帰りついていないからだと推定することができる。

沙流・胆振地方の英雄叙事詩の主な自叙者は「シヌタブカの城主トイヤウンペ」だとされ（金田一（一九三一））、道東の英雄叙事詩では「ポンオタサムンクル」（小さなオタサム人）あるいは「ポンオタスツンクル」（小さなオタスツ人）である（知里（一九六〇）による）。しかし右に示したように、織田さんのユカラでは主な自叙者の固有名はさまざまである。

このなかでトイヤウンペは主な自叙者以外の人物としても現れる。トイヤウンペがまったく登場しないのはユカラ5と10の二話だけで、十三話を通してもっととも登場する頻度が高い人物である。いっぽうオタサムまたはオタスツの住人が何らかのかたちで登場するのは二話しかない。この点は道東よりも沙流・胆振の英雄叙事詩と共にしていると言える。

主な自叙者をめぐる人間関係と固有名の与えかたとには若干の規則性が見いだされる。まず主な自叙者の弟や妹には固有名が与えられることがない。またアイヌモシリでの兄弟関係が描かれれば、兄がトイヤウンペ、弟がトウンブオルンクルとなり、トウンブオルン

クルが主な自叙者である。このパターンはユカラ1、6、11の三話で見られ、そのうちユカラ6ではボイヤウンペとトウンプオルンクのあいだに次兄のアトウサオッカイが登場する。この三話はいずれもイタクラッチさんから聞いたものである。

また主な自叙者の親についての言及がある場合、固有名を持ちるのは親子のどちらかだけである。この場合主な自叙者がトウンブオルンクル・ボイヤウンペなどの固有名を持つことも、逆に親の名がボイヤウンペで主な自叙者は「ボイヤウンペの息子」と呼ばれることもある。後者の例（ユカラ4、8、13）はいずれもイタクラッチさん以外の人から聞いたものである。そのうちユカラ4では織田さんが聞いたもとの録音のテキストが公表されており（静内町教育委員会（一九九二））、そのなかでは登場人物の固有名は示されていない。

十三篇をとおしてボイヤウンペとその息子およびトウンブオルンク以外の人物が自叙者となるのはユカラ5と10だけである。この二話は、ボイヤウンペが登場しないことをはじめ主な自叙者以外の人物も他のユカラとほとんど重ならず、人物構成が明らかに異質だと言える。これらもまたイタクラッチさん以外からの伝承であることは注意を要する。

八、その他の登場人物

主な自叙者が結婚すると明示されているのはユカラ2、3、5、

7、11、12、13の七話である。ただしユカラ2と13では物語の末尾に妻帯したことが述べられるだけで、科白を持って具体的に描かれる結婚相手はユカラ3のオタサムの許嫁、ユカラ5のオタスツの村長の娘、ユカラ7と12のポンチユブカウンマツ、ユカラ11のハンケレブンクルの村長の下の妹である。これらの結婚相手はユカラ3、

11、12のなかでは主な自叙者の戦いを援助する役割を果たし、またユカラ3、5、7では主な自叙者によって保護される対象となる。主な自叙者の親が具体的に描かれるのはユカラ1、2、4、5、8、13のなかでは主な自叙者が親とされるのはユカラ1、4、8、13では主な自叙者、親のあだ討ちをすることになる。またユカラ2では主な自叙者に敵対し、ユカラ5ではあだ討ちを助ける育ての親となっている。

主人公の兄のうち前項で述べたボイヤウンペとアトウサオッカイは、ユカラ1と11では主な自叙者によつて救出される対象となり、ユカラ6では主な自叙者を救出しようとして殺されてしまう。またリクンモシリに住む兄としてはカニオトブウシがユカラ1、3に、オイナユビがユカラ1に現れ、いずれも興奮した主な自叙者をなだめる役である。これらの固有名を持つ兄はいずれもイタクラッチさんから伝承したユカラにのみ登場する。固有名を持たない兄のうち、ユカラ5のハンケレブンクルの村長の年上の息子は主な自叙者の戦いを援助するが、ユカラ13の兄は主な自叙者の行動に特に積極的に関わらない。

アイヌモシリに住む姉はユカラ1、3、6ではオトペランマツ、ユカラ2、11ではノトエランマツと呼ばれる。この両者は一つのユ

カラに同時に登場することはなく、主な自叙者を育て保護するという役割もほぼ共通しており、事実上同一の人格だと言つてよい。これらユカラもすべてイタクラッチさんから聞いたものである。またユカラ5のハンケレブンクルの姉も主な自叙者の保護者だと言える。ほかには固有名を持たない姉がユカラ4、13に登場し、ユカラ4では主な自叙者を援助するがユカラ13では積極的な役割を果たさない。またユカラ1ではリクンモシリに住むオイナサハが登場し、主な自叙者の助太刀をする。

主な自叙者の弟として登場するのはユカラ2の神の弟だけで、当初は敵対的な行動をとるが全体としては主な自叙者に加勢している。妹は同じユカラ2の神の妹のほかには、ユカラ7に固有名を持つたない妹が登場するだけである。十三話をとおして、主な自叙者の弟や妹は固有名が与えられないだけでなく兄や姉に比べると登場することが少ないのである。

親族やヒロイン以外にも主な自叙者に協力する人物が描かれることがある。織田さんによればハンケレブンクルはたいていユカラ4のように主な自叙者と協力関係にあり、ユカラ11のように敵対者となるのは変っているということである。ユカラ7ではリクンモシリに住む狼の首領の娘が主な自叙者の戦いを助けている。カンナモシリに住む神々は、主な自叙者らの戦いによって全世界が滅亡するのを防ぐため、主な自叙者に加勢する姉たちを取り押えたり殺された兄を生き返らせたりする。

主な自叙者の敵の名としてもつとも多く現れるのはトウムンチ

で、ユカラ1、4、6、7、9、13にみられる。このうちボクナモシリにトウムンチの村があると本文に示されるが織田さんが解説したものはユカラ1、7、9で、いずれもイタクラッチさんからの伝承である。ユカラ4ではシンヌタブカの上流にトウムンチの村があり、ユカラ6では海の向こうのルモイの村にトウムンチの女が住んでいる。ユカラ7には「トウムンチはトウムンチどうして結婚するものなのに、人間（の娘）をさらつてどうする。」というような表現があり、このトウムンチが通常の人間ではないことがわかる。ただし「トウムンチ」という語は必ずしも特定のグループを指すのではなく、敵への悪口としても用いられる。たとえばユカラ2は主な自叙者に敵対する父親が「トウムンチじいさん」などと呼ばれることがある。またユカラ6、11、12、13のなかでは、カムイモシリやトウムンチの村へまで人を探し回るというかたちでも言及される。

知里（一九五四）は沙流・胆振の英雄叙事詩での敵を「レブンクル」だとした。織田さんのユカラでは、「レブンクル」がユカラ9で、ハンケレブンクルがユカラ11で、トウイマレブンクルがユカラ5で、それぞれ主な自叙者に敵対する。しかし沙流・胆振で見られるようなレブンクルの村のさまざま固有名は織田さんのユカラには現れない。また右で述べたとおり、「レブンクル」が主な自叙者に協力する場合もあることに注意すべきである。

ユカラ5ではクスルの住人も敵となり、ユカラ4の敵はシンヌタブカの近くの海岸に住む岩の親父である。またリクンモシリに住む神であるカンナカムイがユカラ1、3で、狼の神の娘がユカラ8、

12で悪役として登場する。ユカラ5ではクスルの住人とトウイマレブンクルとが敵対者となる。なおトウムンチを含め地上以外の世界に住む人物が主な自叙者に敵対することは沙流・胆振の英雄叙事詩詩にはあまり見られない。

九・まとめ

以上の考察をまとめると、次のようなことが言える。まず、研究者から録音テープで聞いた二話をおくとすると、ユカラ5と10とは人物構成と場面設定から見てはつきり異質である。残りの九話は、ユカラというジャンル名をはじめ、ポイヤウンヘが必ず登場することと、シンヌタブカという地名がほぼ描かれることなどから、表面的には沙流・胆振の英雄叙事詩と共に通する特徴を持つようにも見える。しかし詳細に検討すれば、主な自叙者が話の途中で交代する例が多いこと、必ずしもボイヤウンペが主な自叙者ではないこと、地上以外のさまざまな世界に住む神々やトウムンチがしばしば主な自叙者に敵対する人物として登場すること、レブンクルの固有の地名が示されないことなど、沙流・胆振にはあまり見られない特徴を有していると言える。

また織田さんの主な伝承元であるイタクラツチさんから聞いたユカラは内容上もある程度まとまりを持つていると考えられ、それにしか見られない特徴や、逆に他の人からのものにしか現れない特徴がいくつか見いだされる。

参考文献

奥田統己（一九九〇）「静内地方のユーカラにおけるリズムの形式について」『口承文芸研究』一三

金田一京助（一九三一）『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』東洋文庫

久保寺逸彦（一九七七）『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店
佐藤知巳（一九九二）「参考 様似のヤイエラブ」静内町教育委員会（編）『静内地方の伝承（II）—織田ステノの口承文芸（2）』

知里真志保（一九五四）「アイヌの神謡」『北方文化研究報告』九
（一九六〇）『アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究』文部省文化財保護委員会『知里真志保著作集 2 説話・神謡編』所収、平凡社

古原敏弘（一九九一）「織田ステノの伝承（I）」静内町教育委員会（編）『静内地方の伝承（I）—織田ステノの口承文芸（1）』
（一九九二）「織田ステノの伝承（II）」静内町教育委員会（編）『静内地方の伝承（II）—織田ステノの口承文芸（2）』
（一九九五）「織田ステノの伝承（III）」静内町教育委員会（編）『静内地方の伝承（V）—織田ステノの口承文芸（5）』
萩中美枝（一九九二）「あとがきにかえて」静内町教育委員会（編）『静内地方の伝承（III）—織田ステノの口承文芸（3）』

（おくだ・おさみ／札幌学院大学人文学部）